

やはり俺の〇〇委員会
はまちがっている。

フリーダムrepair

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

桜丘高校に入学した比企谷八幡は、現代文の課題の作文が原因で担任の明智咲に呼び出されてしまう。

ぼっちを標榜する比企谷八幡にため息混じりに明智咲が出した罰則は…

目次

やはり俺の○○委員会はまちがっている。	1
やはり俺の○○委員会はまちがっている。	2
やはり俺の○○委員会はまちがっている。	3
やはり俺の○○委員会はまちがっている。	9
やはり俺の○○委員会はまちがっている。	20

やはり俺の○○委員会はまちがっている。 1

「中学生生活を振り返って」

桜丘高校1年〇組 比企谷 八幡

青春。

漢字にしてわずかに二文字ながら、その言葉は人の胸を激しく揺さぶる。世に出た大人たちには甘やかな痛みや郷愁を、うら若き乙女には永久の憧れを、そして、俺のような人間には強い嫉妬と憎悪を抱かせる。

俺、こと比企谷八幡の中学生生活は前述のような美しい心象風景で彩られるようなものではなかった。土気色をした仄暗い、モノクロームの世界だった。中学特有の強制部活入部から始まり、1年の始まりにしてクラスのほぼ全員から嫌われるという暗澹たるものであった。それからというものの家と学校とを往復し、休日には図書館へ通い、偶に現れるチンプイラの後輩から逃げては、今度は別の先輩に捕まるという、およそ昨今の中学生らしからぬ日々を過ごしていた。

所謂おめーどこ中だよ?という奴である。

勿論そんな俺にラブコメなど皆無であり無縁もいいところである。

けれど、そのことに一点の悔いもない。むしろ誇りである。

俺は楽しかったのだ。

図書館に通いつめて大長編のファンタジー小説を読み切ったことも、夜中にふとつけたラジオから流れてくるパーソナリティの語りや音楽に聞き惚れたことも、テキストが支配する広大な電子の海で広い上げた心温まる文章も、深夜2時を狙って10連を回したことも、それら全て俺があのような日々を過ごしたからこそ、見つけだし、出会えたものなのだから。

その1つ1つに感謝することはあれ、嘆いて流す涙はない。

：いや、正確には俺が1人で得たモノに限つての話ではあるが。

俺は自身が過ごしたあの時間を、中学三年間という青春の日々を決して否定しない。力強く肯定しよう。その姿勢をこれからも変えることはないだろう。

しかしながら、それは他の全ての者たちの、今現在青春を謳歌せし者たちの日々を否定することではないということだけは示しておきたい。

青春の真つ只中にいる彼らは、敗北すら素敵な思い出に変えてみせる。なんならイジメや迫害ですら彼らにしてみれば一種のコミュニケーションツールであり、全ては彼ら視点の物語なのだ。

彼らの持つ、青春フィルターを通してみれば世界は変わるのだ。

だとすれば、俺のこの青春時代もラブコメ色に染まるのかもしれない。間違っていないかもしれない。

なら、俺が今いるこの場所もいつか輝いて見えるのだろうか。

結論を言おう。

・
・
・

古典教師の明智咲ははあ…と深いため息をつきながら、俺の作文を読み上げた。

こうして聞いていると、自分の文章力がまだまだだと言うことに気づかされる。小難しい単語を並べれば頭が良さそうに見えるんじゃないかという、どこぞの売れない作家が考えそうなこすつからい思考が見透かされる気分だ。

さては、この未熟な文章について呼び出されたのか。
もちろん違うよね。知ってました。

明智先生は結論の部分まで読み上げると額に手を当てて再び深々とため息をついた。

「…さて、比企谷。現代文の授業で出された課題はなんだった？」

「…はあ、『中学生生活を振り返って』というテーマの作文でしたが」

「そうだな。それでなぜ君の作文の結論は、やはり俺の青春ラブコメはまちがっているなんて何処かのライトノベルか映画のタイトルみたいな締めになるんだ？しかも追記に、青春を謳歌せし者たちよ、爆発しろ。」とまで書かれているのはなんだ？テロリストなのか？それともバカなのか？」

明智先生は再びため息をつくと思ましげに髪を掻き上げた。

「そういえば、明智先生は本来古典教師だったはず。」

「何故、貴方に説教をかまされてるんでしょかね、明智先生。」

「そんなことを考えていると、紙束で頭をはたかれた。」

「真面目に聞け」

「はあ、というか先生って、古文の教師だったんじゃない？」

「俺は生活指導も担当してるんだよ。平塚センパ：先生が丸投げしてきた」

職員室の隅っここのほうを眺めると、件の平塚先生がPCに向かってなにやら仕事をしていた。

「…どうも、俺、あの先生苦手なんだよな…なんとというか勝てる気がしない？というか何言ってるか分からんだろうが俺も分からん。」

別の世界線で因縁でもあるのだろうか？何？シユ●ゲの話？

明智先生はそれをちらっと見てから俺の方に向きなおる。

「比企谷。この作文はなんだ？一応言い訳くらいは聞いておかないとな」

先生が渋い声で迫ってくる。普段あまりこういう声を出さないタイプの先生なのでこういう場合ビビりまくってしまう。つつーかマジ怖え。

「ひ、ひや、俺はちゃんと中学生生活を振り返ってますよ？青春なんてこんなもんじゃないでしゅか！だいたい合ってますよ！」

噛みまくりだった。人と話すだけでも緊張するのに、それが教師で1対1となればなおさらだ。

「ほう？ならこの最後の一文は？」

「…いや、それはつい筆に力が乗ってしまったというか」

いやね？ほら、世間一般で言われている、青春なんてまちがえています。というのを強調したかったというか…

あんなもの嘘つばちだ!!という心ハートの主張である。

可愛い彼女とららばーとで制服デートとか、友人の紹介で他校の女子とご飯に行くとかそんなことはありえない。そんなものはフィクションだ。

青春ラブコメには最後にこう付け加えられてあるでしょう？

『??この作品はフィクションであり、実在の事件、人物、団体とは関係ありません』つて。

つまり、あんな青春ラブコメは嘘八百です。みんな騙されているのです。

明智先生ははあ…と三度ため息をついた後に羽織っていた白い白衣から飴玉を取り出すと、ペリペリと包み紙を剥がす。剥がし終わると、持ち手の部分でくると飴玉を一回転され、口に放り込む。カリツという砕けた音と共に、至極真面目な顔でこちらを見据えた。

「君は部活はやってなかったよな？」

「はい」

「…仲の良い友人はいるか？」

「びよ、平等を重んじるのが俺のモットーなので、特に親しい人間を作らないようにしてるんですよ、俺は！」

「つまりはいない、と」

「た、端的に言えば…」

俺がそう答えると、なにやら納得げな明智先生は引き出しから何か書類を取り出して書き込み始めた。

「…恋人、彼女とか、いるのか？」

とかつてなんだよとかつて。俺が彼氏いるって言ったらどうすんだよ。

「今は、いないですけど」

一応未来への希望を込めて「今」の部分にアクセントを置いた。

「そうか…」

先生は今度はどこか潤んだ瞳で俺を見つめる。ゴミが目に入っただけで信じたい。おいやめろ。俺に生暖かくて優しい視線向けんな。

それにしてもなんだよこの流れ。明智先生は熱血教師なの？そのうち腐ったミカンがどうか言い出すの？ヤンキー母校に帰るの？…マジで帰ってくんないかな。

明智先生は何事か思案したのち、ふう、とため息交じりに啞えていた飴の棒を口の中から取り出した。

「そうだな、こうしよう。レポートは書き直せ」

「は？」

ですよね。

よし、今度はごくごく適当に当たり障りのない文章を書こう。それこそ声優ブログやアイドル公式サイトくらい。『今日のご飯はなんと…、ハンバーグでしたっ！』みたいな。なんとっ！ってなんだよ何一つ意外じゃねえよ

ここまでは想定範囲内。俺の想像を超えていたのはこの後だ。

「だが、君がこのまま成長すればきつといつか痛い目を見るに違いない。取り返しのつかないことになる前に、軌道修正したほうがいい。なので、君にはある部活動を命じる。

学校つてのは後ろは振り返らない、前だけ向いていればいい場所だが、何事にも例外は付き物だ」

余計なお世話である。

とは言え、ここで駄々を捏ねたところで状況が好転するとも思えない。ここは一旦従ったフリをしつつ、さりげなく部活からフェードアウトするやり方のほうが良さそう
だ。

「部活動つて…何すればいいんですか？」

恐る恐る尋ねた。もうね、ドブさらいしろどころか人攫いしろとか言われない雰囲気。

「ついてきなさい」

手イタズラに持っていた飴玉の包み紙をゴミ箱に捨てると明智先生は立ち上がる。説明も前振りもない急な提案に俺が止まっていると、扉の前で明智先生が振り返った。

「おい、早くしろ」

きりりとした目に睨まれて俺は慌てて後を追った。

やはり俺の○○委員会はまちがっている。 2

この桜丘高校の校舎は少し歪な形をしている。

上空から見下ろせば、ちょうど漢字の口、カタカナの口によく似ている。ちょうど視聴覚室の部分をつけ足してあげれば我が校の俯瞰図が完成する。

この視聴覚室だが割と普通の高校より機材が揃ってる、なんて入学案内のパンフレットにも書かれていた。

なんでも、桜丘高校は映画研究が盛んに行われているのか映画のナントカ賞を取った先輩もいるらしく、映画研究部、なんてのもある。

道路側に教室棟、それと向き合うように特別棟がある。それぞれは二階の渡り廊下で結ばれており、加えて三年生の教室は教室棟より特別棟の方に密集する為、新入生は三年の教室に行くと大抵迷うと誰かが言っているのを聞いた。

他に、特別棟は最上階まで行くと高校にしては珍しく花壇に花が咲き乱れた屋上がある。

校舎で四方に囲まれた空間がリア充どもの聖地・屋上だ。

彼らは昼休みになると男女混合で昼食をとり、放課後には暮れなずむ校舎をバックに

愛を語らい、夜風を浴びて星を見る。

なめとんのか。

傍から見ると青春ドラマの配役を頑張つて演じてるような、そんなうすら寒さしか感じない。そこでの俺の役は『木』とかそんな感じだ。

明智先生がリノリウムの床をかつかつ言わせながら向かうのはどうやら特別棟のようだ。

…嫌な予感がする。

そもそも部活というのがロクなモノじゃない。

ここは一つ予防線を張つておこう。

「俺、腰に持病がありましてね…あの、ヘル、ヘル、ヘルパス？あれなんですよ…」

「ヘルニアと言いたいんだろが、その心配は無用だよ。君に入ってもらいたいのは運動部じゃない」

明智先生は馬鹿にしくさった表情で俺を見た。

ふむ、ということは、文芸部とか文化系の部活か。そうした運動部以外の文化系の部活はある意味で大学のサークルくらいノリが必要とされる場合もある。

「俺、教室に入ると死んでしまう病が」

「…どこのながつぱな狙撃手だ。麦わら海賊団か」

あんたマンガ読んでんのかよ。

まあ、文化系の部活とは言え俺を入れようとするくらいだ。そんな活動的な部活ではないだろう。なら、心のスイッチを切つて「俺は機械だ」と割り切れれば何の問題もない。こうなつたら最終的には機械の身体を求めてネジになる勢いだ。

「着いたぞ」

先生が止まっていたのは視聴覚室から大分離れた何の変哲もない教室。

プレートには何も書かれていない。

俺が不思議に思つて眺めていると、先生はからりと戸を開けた。

その教室は椅子が数個と長机が一つポツンとあるだけだった。空き部屋として使われているのだろうか。他の教室と違うのはそこだけで、何も特殊な内装はない、いたつて普通の教室。

けれど、そこにいた一人の少女のおかげか、かつての嫌な記憶がフラッシュバックして脂汗が一筋背から流れた。

少女は窓の外を眺めていた。

彼女は来訪者に気がつくつと、窓に向いていた身体をこちらへ向けた。

「明智先生、何か御用ですか？……つて、貴方は」

端正な顔立ち。流れる黒髪は左右二つに結ばれて所謂ツインテール状になっている。

「ん？君たち知り合い？」

それは明智先生の予想外の反応だったのか、先生は俺と彼女を見渡した。

が、まあ、この目の前にいる少女が知り合いかどうかと聞かれると、特に話したことがある訳でもないからなんとも反論できない。

だが、俺はこういった場合のベストアンサーを知っている。

「中学の同級生です」

そうそう、これで正解のはず。だって、俺が友達だと思つてた奴も、人に紹介する時、俺のことこう言つてたもん。

俺が答えると彼女も苦笑いをしながら頬をかいた。

そう、俺はこの少女を知つてはいる。

高見沢アリサ。

俺と同じ中学にして元クラスメート。

無論、名前と顔を知っているだけで会話をしたことはない。仕方ないだろ、学校で人と会話すること自体が稀なんだから。

ただ、俺が中学の時強制入部として入れられていた変な部活の活動内容の一環に、依頼主の手助け、というものがあつた。

その際、彼女と俺が元いた部活、奉仕部の依頼主の関係がちよつと色々あつて、彼

女の名前を知っているに過ぎない。

「そう、知っているなら話は早い。高見沢、彼は入部希望者だ」

明智先生に促され、つい会釈してしまう。：いやいや、会釈とかしてる場合じゃねえ。
「え？は？」

入部希望つてどこへだよ。ここ何部だよ。

俺の言葉の続きを察してくれたのか、明智先生が口を開いた。

「君には今回の課題のペナルティとしてここでの部活動を命じます。異論反論抗議質問口応えは一切受け付けません。しばらく頭を冷やせ。反省しなさい」

俺の抗弁の余地を許さず、明智先生は怒涛の勢いで判決を申し渡す。

「というわけで、高見沢、後よろしく。俺は映画研究部の方をちよつと見てくるから」とだけ言うと、先生はそのままさっさと帰ってしまう。

ぼつんと取り残される俺。

正直、独りぼつちで取り残されるほうがよっぽど気が楽だ。いつもと同じ孤独という環境の方が心が安らぐ。

カチカチカチという時計の秒針の音がやけにゆっくりやたら大きく聞こえる。

おいおい、マジかよ。美少女と二人きりの教室とかいきなりのラブコメ展開？すつごい緊張感が降りかかってきたよこれ。

シチュエーションとしては文句がない。

ふと中学時代の甘酸っぱい思い出が蘇る。

放課後、二人きりの教室。

そよ風でカーテンが揺れ、傾いた日差しが降り注ぎ、そして勇気を出して告白した一人の少年。今でも克明に思い出すことが出来るあの子の声。

『友達じゃダメかなあ?』

あーいや、これダメな思い出じゃん。しかも友達どころかそれ以降一度も話さなかったし。

おかげで友達って会話もしない仲のことかと思っちゃったからね俺。

まあ、要するに俺に関しては、美少女と密室に二人きりになるうがラブコメなんて現実には起きないのである。

高度に訓練された俺が今さらそんなトラップに引っかかるわけがない。女子とはイケメン（笑）やりア充（笑）に興味を示すものであり、またそれらの連中と清くない男女交際をする輩である。

つまり俺の敵だ。

二度とあんな思いをしなくて済むように俺は努力を続けてきた。ラブコメ展開に巻き込まれないためには嫌われてしまうのが一番早い、幸いにして高見沢は中学からの俺

を知っている。すなわち、初見にして好意度は最下位下回ってマイナス!!

肉を切らせて骨を断つ。自らのプライドを守るためなら好感度など必要ないのだっ
!

なので俺は挨拶代わりに高見沢を睨み付けつつ威嚇しておくことにした。真の英雄は目で殺す!

がるるるーっ。

すると高見沢は先程の苦笑の表示を再び浮かべこちらを見る。そして、清流のような声で俺に言葉をかけた。

「…まあ、そんなところで立ってないで座りなよ」

「え、あ、はい」

あまりにも大人な対応を取られてしまい、逆に恥ずかしくなった。

穴があつたら入りたい!俺は手で顔を覆うと空いている席に腰かけた。

「それで、入部希望って聞いたけど?」

高見沢は自身のツインテールをふりふりと揺らして、聞いてくる。

「あ、ああ、何か成り行きでな…ところで、ここ何部なんだ?」

「?明智先生から聞いてないの?」

「いや、だつてわけわからん説明しかなくてここへ連れてこられたもんだから」

俺がそう言うのと、高見沢は何やら考慮するポーズを取る。いやいや、お前ここの部員なんじゃないの？

「…そういうええここ、何部なのかしらね？」

「ええ…」

お前も知らねえのかよ。

「仕方ないでしょ！私も昨日明智先生に連れてこられたばかりなのよ!!」

何故か逆ギレされた。

え？なに？こわ、なんなのこの子？キレやすい若者なの？カルシウムとか取ったほうがいい。ししやもとか食べ、乳酸菌取ってる??

「ま、まあ、知らねえんじや推測するしかねえよな」

与えられた情報ゼロ。はつきり言つてノーヒント。

ーいや、待て。逆に言えばヒントしかない。

自慢じゃないが小さいころから友達が少ない俺は、一人でできるゲームはめっちゃくちや得意だ。ゲームブックや謎々の類いはかなり自信がある。高校生クイズだって勝てると思う。まあ他のメンバーを集めることができないから出場できないけどな。

ここまでわかつていることはいくつかある。それをもとに組み立てれば答えは自ずと出てくるはずだ。

「口研（路上研究会）とか」

「へえ…。その心は？」

高見沢はいくらか興味深げに問い返してくる。

「特別な環境、特別な機器を必要とせず、人数がいなくても廃部にならない。つまり、部費なんて必要としない部活だ。加えて、高見沢、あんたは外を眺めていた。答えは最初から示されていたのさ」

我ながら完璧推理。「あれれーおかしいよー？」とか言いながらヒントを出してくるメガネの小学生がいなくてもこれくらいは朝飯前だ。

高見沢は多少なりとも感心したのか、ふむと小さく息をつく。

「違うんじゃない？ 私たまたま外を眺めていただけだし」

……。

「…それじゃ何部なんだよ？」

こんなんわかるかよ。もつと簡単に分かるのにしろよ。「家が大火事、涙が洪水、なあんだ？」みたいだよ。それただの火事じゃねえか。

「それは…私に聞かれても分からない、けど…」

「…まあ、そうだよな」

二人して言葉に詰まる。

俺は勿論、見たところ高見沢もそんなに積極的に人に話しかけていくタイプには見えない。

そこからは何となく会話の切り口が見つからず静寂が流れた。

そんな静けさを最初に破ったのは高見沢の方だった。

「…あ、あのさ、中学の時…」

高見沢が何かを言いかけたその時、じーつと、壊れたラジオのような音がする。チャイムが鳴る前兆だ。

いかにも合成音声っぽいメロディが流れると、完全下校時刻を知らせる放送が流れる。

「…下校時刻みたいだな」

「え？あ、うん」

俺は床に置いてあった鞆を抱え、席を立つ。

高見沢は未だに何か言いたそうにしているが、そこはそれ、別に今日聞かなくてもいいことだろう。

というか、今日は俺の黒歴史のことなんて女子の口から聞きたくない。

全くなんて厄日だろうか。職員室に呼び出されるわ、名称不明の謎の部活動に加入させられるわ、中学の頃の同級生に会うわ、かなりの大ダメージを受けた。

だいたい部活なんてものは傍から見てるのが正解なんだよな。俺の中では部活動なんて、女の子達がバンドやってんのを円盤で見てるくらいの参加の仕方がちよūdい。

こーゆー展開を経てラブコメ展開に発展する？それはないわ。先程も述べたが、俺にラブコメ展開はありえない。訓練されたぼっちにその罫が見破れないワケがない。

やはり青春なんて嘘ばかりだ。

高校三年夏の大会で負けた自分たちを美しいものに仕立て上げるために涙を流し、大受験に失敗して浪人した自分を誤魔化すため挫折は人生経験だと言いつたり、好きな人に告白できない自分を偽るために相手の幸福を考えて身を引いたと嘯いたり。

まあ、なんだ、つまり結論を言うのだな：

”やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。”

やはり俺の○○委員会はまちがっている。3

帰りのHRは出走前のゲートに似ている。放課後を告げるファンファーレを合図に、教室中の動物たちが動き出すからだ。

だが、ここにいるのは選抜されたサラブレッドたちじゃない。馬にロバに子豚にタヌキにキツネに猫、一富士二鷹三茄子、まあ、とにかく。みんな違ってみんな争う異種族格闘技戦の会場を呈しているのが教室という空間だ。

ざわざわとしたさざ波のような小さなおしゃべり声は狼の遠吠えやカエルの鳴き声にも聞こえる。

かくいう俺もさつきからケロケロけえろーけえろーと心中で泣いている。そんなHRを終えて教室を出た俺を待ち構えていたのは明智先生だった。

白衣を翻し、出席簿を片手に立つ姿はさながら死亡解剖のドクターのようである。もうなんか手術着でも着せてメスでも持たせたら似合うんじゃないかと思う。

「はい、比企谷君。部活の時間です」

そう言われて血の気がサーッと引くのがわかった。やべえ、連行される。

その証拠に、バカ丁寧に君づけして俺を呼んでくるところ辺り俺の危機管理センサー

が反応している。

だが、明智先生はそんなことを斟酌するわけもなく、にこりと無機質な笑顔を向けた。「行くぞ」

ふええ…俺に選択権がないよう…

しかし、ここはガツンと言つてやらなければならぬ。

「あのですね、思うんですが生徒の自主性を尊重し自立を促す学校教育という観点から考えても、こうやって強制されることに異議を唱えたいのですが」

「残念だが、学校は社会に適応させるための訓練の場だ。社会に出れば君の意見など通らない。今のうちから強制されることに慣れておきなさい」

ぼん、と優しめに出席簿で叩かれた。

…やっぱり社会とかダメだな。これはやはり専業主夫しか道は無いと見た。

はあ…と一つため息を吐く。

ええ…やっぱり行かないとダメかなあ…というかあの部活なんなんだよ。

「あの、別に逃げたりしないんで一人で大丈夫ですよ。ほら俺いつも一人だし。一人全然平気。むしろ一人じゃないと落ち着かないレベル」

「ふむ…まあ、そういうな、俺が一緒に行きたいんだよ」

ふっと先生が優しげに微笑んだ。

「お前を逃して後で歯噛みするくらいなら、嫌々でも連行した方が俺の心理的ストレスが少ない」

「理由が最低ですね！」

「何を言う。ぶつちやけ面倒だが、君を更正させるためにこうして付き合っているんだぞ。美しい師弟愛というやつだ」

「これが愛なら愛などいらぬです」

「さっきの言い訳といい、君は本当に捻くれてるなあ…もう少し素直な方が可愛げがあるぞ。世の中を斜めに見ても別に楽しくはないだろう？」

「楽しいだけが世の中じゃないですよ。楽しきやいいって価値観だけで世界が成立してたら全米が泣くような映画は作られないでしょ。悲劇に快楽を見出すこともあるわけだし」

言うとき明智先生は呆れたようにため息を吐く。

「…君くらい年齢にはありがちな考えだとは思いますが…君は典型的だな。捻くれていることがカッコいいと思っていたり、変に悟った雰囲気を出しながら捻くれた理論を持ち出したり…一言で言ったら嫌な奴だ」

「嫌な奴って…くそっ！だいたい合ってるから反論できねえ！」

「まあ、君のような生徒は見ていて面白いよ。最近の生徒は実に器用に現実と折り合い

をつけてしまうからね。教師としては張り合いがない」

「最近の生徒は、ですか」

俺は思わず苦笑してしまった。出たよ常套句。

とまあ、俺がうんざりして軽く論破の一つでもしてやろうかとする、明智先生はじつところこちらを見てから肩を竦めた。

「ま、頑張りなさい。若人よ」

……

明智先生は俺の肩にポンと軽く叩くと並んで歩き始めた。

部室付近まで来ると流石に逃げる心配はしなくなったのか、先生はようやく解放してくれた。

去り際にちらちらとこちらに視線を送ってくる。勿論別れが名残おしいとかそんな優しいな感情はどこにもなく、「逃げたらわかつてるだろうな」という殺意だけがびんびんと伝わってきた。

俺はそれに苦笑しながら廊下を歩く。

部室の付近はしんと静まり返り、ひんやりとした空気が流れていた。

他にも活動している部活はあるはずなのに、その喧騒もここまでは届かないらしい。

この部活のことを先程、明智先生に聞いてみたところわかったことが3つある。

一つは、この部活は俺と入れ替わりに卒業した先輩が校長を脅し：もとい説得して創設したということ。

二つ目は、この部の正式な名前は決まっておらず、本来は平塚先生（現代文教師）が顧問であり、件の先輩が卒業すると同時に明智先生に引き継ぎさせられたということ。

三つ目は、活動内容は、他者の依頼を聞き、困っている人に奉仕活動することが目的である。

所謂ところの俺が以前中学時代に所属していた奉仕部に似た活動内容であるということ。

：いやいやいや。色々とおかしい。

そもそも奉仕活動という言葉はろくなもんじやない。

奉仕なんて言葉は日常生活で出てきていいものではなく、より限定的な状況下でのみ使用が許されるものだと思う。

例えば、メイドさんがご主人様にご奉仕とか。そういうご奉仕ならウエルカムだし、レッツパーリーなわけだが、現実そんなことはあるわけがない。いや、一定料金払え

ばできる。また、この金を払えばなんとかできてしまうあたり、夢も希望もあったものじゃない。とにかく、こういう奉仕系なんてダメなものだ。

それに加えてこれは部活であると来たもんだ。…また、中学時代のような奉仕活動系に決まっている。

はあ…とため息をつき、部室の扉を開けようと手を掛ける。

正直気が重いのが、かといって逃げるのも癪にさわる。

不可抗力という言葉があるように、世の中にはどうもしょうの無い事態や動かさない状況というものもあるのだ。

…ああ、いやでも、そういうや、一人だけそんな状況を根本から変えたヤツがいたな。

もう、三年も前の話で、些細は覚えていない。

ただ、1人の少女を狙ってクラスの男女が無視、迫害、チェーンメール…所謂イジメを行っていたクラスがあった。

中学生のイジメだ、キツカケなんて些細なものだっただろうし、もしかすれば無かったのかもしれない。

そんなクラスのイジメが堂々に行われていた為もあつて教室は悪意に満ちた空気が流れていた。

そんなある日、教室の扉が思いつきり開けられると、そこにいた人物が叫んだ。

”このままじゃ、ダメだって!!”

あれは：いや、その言葉や人物はともかく。悪意そのものはその日を境に、とは言い難いが、少なくともイジメの的になっていた少女はその日から目に見えてイジメられはしなくなった。

まあ、あの時の状況と今の状況を比較するのは相当おこがましいと自分自身でもそう思うけどな。

部室の扉を開くと、高見沢は昨日とほぼ同じ位置で雑誌をペラペラめくっていた。

「……よう」

戸を開けたはいいいものの、何と声をかけていいのかわからない。

とりあえず、気持ち挨拶して彼女の方へ進む。

高見沢はこちらをちらりと見ると、体をこちらに向けた。

「こんにちは、比企谷君」

機械的ではあったが挨拶を口にすると、高見沢はにつこり微笑んだ。

たぶん、これが高見沢アリサが見せた初めての笑顔。笑うと口元にえくぼができるとか、少し八重歯が覗くとかそんなどうでもいい知識を得てしまった。

：正直、その笑顔は反則だと思う。それはもうマラドーナの神の手クラスの反則。要するに、最終的にはこの部活のことを認めざるを得ないんだけど。

…しかしまあ、こんなワケの分からん部活に顔出すとか、コイツも暇だな。友達とかいないのか？

「…なんだか、とても失礼なことを考えられてる気がするんだけど」

高見沢はジトーと目を細めて睨んでくる。

や、なんなのこの子、エスパー？

「ああ、いや、今日もこんなワケの分からん部活に来てるんだなっと思ってな」

「そりや来るでしょ、部員なんだし」

ああうん、まあ、そうなんだけどね？

「いや、ほら、こんな活動してるかしてないか分からんような部活な訳だし、別に毎日来なくちやいけないような活動もしてなさそうだから、来てないかなと」

「…まあ、他にすることもないから…」

何か悲しいことを言われた気がする。

そう言う高見沢の視線は明後日の方向に向けられている。おかげで顎から首にかけてのなだらかなラインが綺麗だなとか死ぬほど無駄な知識が増えた。

その様子を見て俺は1つの考えに至る。

いや、でもな。一応、聞いておくか…。

「なあ、お前さ、友達いんの？」

俺がそう言うと、高見沢はふいつと視線を逸らした。

「…そうね、まずどこから友達なのか教えてもらっていい？」

「あー、うん、もういい、わかった」

それは友達がいらない奴が友達の定義を聞くときに使うセリフなのである。

ソースは俺。

まあ、でも真面目な話、どこからどこまでが友達かなんて分からないよな。知り合いとどう違うのかそろそろ誰かに説明してもらいたい。

一度会ったら友達で毎日会ったら兄弟なの？ミドフアドレッシーソラオ？なんでオだけ音階じゃねーんだよ。そこまでこだわれよ。

そもそも、知人友人の差異を表すときの言い回しがこれまた微妙なんだよな。特に女子の場合だとそれが顕著だ。同じクラスの人間でも、クラスメイト、友人、親友みたいな感じでランク分けされている気がする。じゃあその違いはどこから来てるのかって話だよ。

閑話休題。

「つつーか、お前、見た目もいい方だし人に好かれそうなくせに友達いないとかどういことだよ」

俺が言ううと高見沢はむつとする。それから少し不機嫌そうに視線を外してから口を

開いた。

「いないなんて言っていないでしょう？もし仮にいないとしても別に困らないし…」

心なしか頬を膨らませて、そっぽを向く高見沢。

そりやまあ俺と高見沢は全く違う人間だし、彼女が考えていることなんて微塵も分かりはしない。聞かせてもらったところでそれを理解するのは難しいだろう。

どこまでいっても結局は人と人は理解し合えない。

だか、こと、ぼつちに関してだけはおそらく俺は高見沢を理解できる。

「まあ、お前の言い分はわからなくもないんだ。一人だって楽しい時間を過ごせるし、むしろ、一人でいちゃいけないなんて価値観がもう気持ち悪い」

「……………」

高見沢は一瞬俺の方を見たが、すぐに顔を正面に戻して目を瞑った。何かを考えている仕草にも見える。

「好きで一人でいるのに勝手に憐れまれるのもイラツとくるもんだよな。わかるわかる」

「…なんだか勝手に同意されることが少し腹立たしいんだけど」

そう言つて苛立ちをぐまかすようにツイントールを振るう高見沢。

「まあ、私と貴方とじゃ程度は違うけど、一人でいるってことは同じなのかもね、ちよつ

と癩だけど」

最後にそう付け足して高見沢は自嘲気味に微笑んだ。どこか仄暗い、けれども穏やかな笑みだ。

「程度が違うってどういう意味だ…ひとりぼっちにかけては俺も一家言ある。ぼっちマスタールと言われてもいいくらいだ。むしろ、お前程度でぼっち語るとか片腹痛いよ？」

「なに…この悲壮感たつぷりの頼り甲斐…」

高見沢は驚愕と呆れに満ちた顔で俺を見た。その表情を引き出したことに満足感を覚え、俺は勝ち誇ったように言う。

「人に好かれるくせにぼっち語るとかぼっちの風上にも置けねえな」

高見沢は少し考えるような間を取ると、口を開いた。

「…そうかもね、だけど、私、好きなものは好きって言いたいなのよ。だってそうでしょ？ 嫌ってばかりじゃつまらないもの。」

真っ直ぐに向けられた高見沢の視線に逆に逸らしたくなりつつも彼女は続ける。

「胸を張って、これが『私』って誇れるような自分になりたい。学校なんて狭い世界の中で、縮こまったままどこにも行けないなんてつまらないじゃない。世界はこんなにも広くて、どこにでも行ける。だから、私は自分の気持ちに正直でありたいのよ」

高見沢の目は本気の目で、真夏の太陽みたいな熱に火傷しそうだ。

「…そうかい。俺にはそこまで強い奴のことはわかんねえけどな…人は、そんなに強くねーだろ」

「そうよ。まあ、私は比企谷君の…そうやって弱さを肯定してあげられる部分、嫌いじゃないけどね」

そう言つて、高見沢はふいつと窓の外に目をやった。

俺が言うのもなんだが、高見沢アリサは不器用な生き方をしてると思う。

傍目には整った顔立ちで、コミュ力がないという、わけでもない。

しかし、自分を信じ、自分に正直に生きるといふその生き方は嘘を許容しない茨の道のような生き方だ。

きつと彼女だつて、協調して騙し騙し、自分と周りをごまかしながらやっていくことは難しくないはずだ。世の中の多くの人間はそうしているのだから。

勉強が得意な人間がテストで良い点をとつてもマグレだやマが当たつただの言うように。

美少女がブスにひがまれたら皮下脂肪が最近どうのと自分の醜さを主張するように。けれど高見沢はそれをしない。

自らに決して嘘をつかない。

その姿勢は、きつと誰かに共通している。

高見沢は苦笑しながら雑誌のページをめくった。

そこに写っているのは1人の読者モデル。

ファンなのだろうか、ページの先端には折り込みがされていた。

それを見て、俺は不意に妙な気持ちに囚われる。

きつと高見沢と、彼女、は似ている。

もしかすると高見沢は、彼女、の影響を受けたのかもしれない。

少しだけ、自分の鼓動が速くなるのを感じた。心臓の刻む律動が秒針の速度を追い越してもっと先へ進みたいと、そう言ってる気がした。

なら、なら俺は。

「なあ、高見沢、お前……」

俺が口を開いた瞬間、じーっという下校を知らせるチャイムがなる。

「あ、もう下校時刻?……?比企谷君何か言った?」

「……いいや、別に、何も?」

あつぶねえ!!何か気持ち悪いことを口走りそうになっていた。

そう、例えば……友達になって下さい。とかな?1週間で記憶がリセットされるわけでもなし、そんなことすれば一ヶ月は俺、自分の家で引きこもってしまふこと請け合いです。

ある。

俺にそんな青春展開は不要である。ラブコメとか友情・努力・勝利とか爆発しろ。